

スキーマの個別性が虚再生に及ぼす影響 —スキーマの強度の観点から—

田 中 晶 子

(平成17年9月30日 提出)

日常の様々な出来事はそれぞれ個別に記憶されるのではなく、既存のスキーマに関連づけて統合され、記憶されている。このようなスキーマの持つ補完機能によって、リアリティモニタリングエラーが生じる場合がある。このリアリティモニタリングエラーは、特に目撃証言において問題とされる。これまで、スキーマがリアリティモニタリングの成否に及ぼす影響について、スキーマの個別性に注目した検討がなされている。それによると、目撃者が持つスキーマが広く一般にあてはまるようなスキーマよりも、特定のものにしかあてはまらない個別性の高いスキーマのほうが、後のリアリティモニタリングが困難になることが示されている(田中・広瀬・高岡, 2005)。本研究では、先行研究で検討されてきた個別性の高いスキーマの強度に注目し、スキーマの強度の違いによるリアリティモニタリングへの影響を検討することを目的とした。強固なスキーマを持つ被験者群と比較的弱いスキーマを持つ被験者群とを設定し、特に個別性の高いスキーマが利用される虚再生の生起について検証し、考察を試みた。

キーワード：スキーマの個別性、スキーマの強度、リアリティモニタリング、目撃証言

問題

スキーマとは、出来事、シナリオ、行為、事物などに関する過去の経験から得た一般的な知識を表す(Eysenck, 1990)。このスキーマは、私たちの記憶の抽象化を促し、一般的な意味の保持を助ける。また、不明確な情報を解釈するのを助ける働きを担っている。つまり、日常の様々な出来事はそれぞれ個別に記憶されるのではなく、既存のスキーマに関連づけて統合され、記憶されるのである。統合の過程で、情報は一般化、抽象化される傾向があるため、個々の情報は変化し、また省略されることもある。このようなスキーマによる情報の変化や省略は日常記憶を効率的に行う上で有効に働いている。例えば、人の顔や動作は常に

変化し、服装なども一様ではないが、私たちは昨日の友人と今日の友人を同じ人物であると簡単に同定することができる。これは、私たちの記憶が細かい変化を捨象しつつ友人の特徴を符号化し、それを一般的な情報で補完して認識している(仲, 2001)からである。このようなスキーマの補完機能は多くの研究で示されている(例えば、Salmaso, Baroni, Job, & Peron, 1983; Intraub & Richardson, 1989; Waddell & Rogoff, 1987)。

しかし、スキーマの補完機能が正確な記憶を阻害する場合もある。Brewer and Treyen(1981)では、実際には大学院生の部屋にはなかった事物を被験者が「あった」と報告する誤り(誤警報)のほとんどが、スキーマに一致した事物であったと

いう結果が示された。この結果は、私たちは必ずしも自分が実際に見た部屋の記憶を想起するのではなく、一般的な「大学院生の部屋」というスキーマに基づいた推論から補完された事物も報告していることを示している。同様の結果はNakamura, Greasser, Zimmerman, and Rihá (1985)、Barclay and Wellman (1986)でも示されている。

実際にはなかったものを「あった」と報告してしまうという誤警報の問題は、日常場面で重大な問題として取り上げられることは少ない。しかし、裁判などにおける目撃証言の場合、それは重大な問題となる。個別の出来事の正確な記憶が求められる目撃証言では、実際にはなかったことをスキーマに基づいた推測から「あった」と報告してしまうことは重大な誤りとなる。そしてそれは、事件解決の妨げとなったり、冤罪など取り返しのつかない事態を引き起こすことになる。

この危険性は目撃証言に焦点を当てた研究においても示されている。Lis (1986)は、万引き事件のビデオを用いて、万引きに関するスキーマからの予測がビデオで見た事柄の記憶にどのように影響を及ぼすかを検討した。その結果、スキーマに一致する内容の方が一致しない内容よりも実際にビデオで見た内容の正答率が高かった。しかし、スキーマに一致する内容の方が、実際にはビデオで見ていない内容について誤って見たとする誤警報率も高かったのである。Lis (1986)の研究は、万引きという犯罪についてのスキーマを用いて、前述のBrewer and Treyen (1981)で示された結果を、より目撃証言事態に近づけて再現したものであると考えられる。

このように目撃証言で問題とされる、実際にはなかった事柄を「あった」と誤って思い出してしまうという問題に対しては、ソースモニタリング (source monitoring) の観点から検討が試みられている。ソースモニタリングとは、情報の起源につ

いての記憶 (ソースメモリ) を弁別し、判断する認知プロセスの1つである (Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993; 金城, 2001)。ソースモニタリングの中でも、実際に自分が見た事柄 (外的記憶) なのか、それともスキーマなどにに基づき推測、想像した事柄 (内的記憶) なのかという判断プロセスは、リアリティモニタリング (reality monitoring) と呼ばれる。目撃証言では、目撃者自身の推測や解釈という内的記憶と、実際に目撃した出来事という外的記憶は明確に区別されなければならない。つまり、目撃者は正確なリアリティモニタリングが常に求められていると言える。

スキーマがリアリティモニタリングの成否に及ぼす影響について田中・広瀬・高岡 (2005)は、スキーマの個別性に注目し、目撃者が持つスキーマが広く一般にあてはまるような個別性の低いスキーマよりも、特定のものにしかあてはまらない個別性の高いスキーマのほうが、後のリアリティモニタリングが困難になることを示した。この結果は、一般的にスキーマが目撃証言に影響するかどうかではなく、私たちの推測や想像のもとになるスキーマによっては、リアリティモニタリングの成否に大きな影響を及ぼすということを示唆している。この結果は個別的な聞き取り場面を設定した場合にも同様の結果が追認されており (田中, 2003)、目撃証言の正確性にとって見逃すことのできない点であると思われる。

そこで本研究では、新たに個別性の高いスキーマの強度に着目した。これまでの研究で検討されてきた個別性の高いスキーマは、普段の生活と密接に関連し、日々の経験を通して獲得されたものであった。したがって、そのスキーマを頻繁に利用する者、あるいは長期間そのスキーマを利用している者は、強固な個別性の高いスキーマを有すると考えられる。一方、知識としては個別性の高いスキーマを有しているものの、そのスキーマを

実際にほとんど利用したことがない者、あるいはそのスキーマを利用して間もない者は、個性性の高いスキーマの強度が比較的弱いと考えられる。本研究では、このような個性性の高いスキーマの強度によるリアリティモニタリングへの影響を2種類のテスト条件において検討した。具体的には、K女子大学の図書館を含む建物の特殊な構造に関する知識を個性性の高いスキーマとして設定した。これは、田中ら(2005)などで設定されたスキーマと同様である。このようなスキーマの設定に基づき、本研究ではK女子大学に入学して間もない新入生を弱い個性性の高いスキーマを持つ群(スキーマ弱群)とした。入学後間もない新入生は、大学についてのオリエンテーションなどで図書館の建物についての知識は有している。しかし、実際にその建物を利用した期間は短く、利用頻度も少ないと思われる。したがって、個性性の高いスキーマを有するものの、その強度は弱いと予想される。一方、K女子大学にすでに長期間通っている在學生は、強い個性性の高いスキーマを持つ群(スキーマ強群)とした。在學生は、新入生と比べ図書館を含む建物の利用期間が長く、利用頻度も多いと予想される。したがって、在學生の有する個性性の高いスキーマは、新入生と比べて強固なものであると考えられる。このように、個性性の高いスキーマを獲得してからの期間に基づき、個性性の高いスキーマの強度の操作を試みた。また、本研究では個性性の高いスキーマの影響を検討するため、これまでと同様に、自由再生条件とリアリティモニタリング条件の2種類のテスト条件を設定した。これにより、個性性の高いスキーマの強度によるリアリティモニタリングへの影響を検証することが、本研究の目的である。

方法

実験計画

2(被験者群; スキーマ強群・スキーマ弱群)×2(テスト条件; 自由再生・リアリティモニタリング)の2要因計画であり、どちらも被験者間要因であった。

被験者

スキーマ弱群としてK女子大学新入生76名(平均年齢18.7歳)、スキーマ強群としてK女子大学在學生である2～4回生66名(平均年齢20.7歳)の142名が実験に参加した。さらに被験者は2種類のテスト条件にランダムに振り分けられた。その結果、スキーマ弱群は、自由再生条件41名、リアリティモニタリング条件35名、スキーマ強群は自由再生条件36名、リアリティモニタリング条件30名であった。

著しく再生の記述内容が異なるもの(会話調の再生やまったくの創作)、リアリティモニタリング法においてまったく下線が引かれていないものはあらかじめ分析から除外された。

刺激および装置

(1) ビデオクリップ

ビデオクリップは、デジタルビデオカメラで撮影され、11の場面からなり、映像はカラーで無音声であった。時間は全体で2分33秒であった。ビデオの内容は「図書館で勉強していた2人のうち1人が立ち上がる。図書館から出てエレベーターの前まで行く。廊下を歩き喫茶室で飲み物を飲む。門を出て車のところまで歩いてくるが、車の前で鍵がないことに気付く。走って戻る。図書館で一緒だった友人と建物から出て別れる。再び車の前まで歩き、鍵を開け車に乗り込む」というものであった。この刺激は、田中ら(2005)で用いられたものと同じであった。

登場人物は2人の女性である。その内の1人が主要な登場人物となる。登場人物は日常的な状態

となるように、服装や動きに配慮した。

撮影は、K女子大学内で広く利用されており、またK女子大学固有の特徴を持つ図書館を中心に行われた。K女子大学の図書館は入館ゲートが5階にある。そのため、図書館に入る時はまずエレベーターで5階まで上がり、入館ゲートを通ってから図書館内の階段を使って下階へ移動しなければならない。図書館は建物の1階から5階までをしめるが、5階以外のフロアから図書館に入ることとは出来ない。この建物の地階には喫茶室があり、喫茶室へは地階から入ることができる。ビデオクリップで登場人物が飲み物を飲んだ場所はこの喫茶室であった。この特殊な建物の構造やそれに伴うスキーマを個別性の高いスキーマとした。したがって、図書館や喫茶室の場面によって、K女子大学に通うすべての被験者は、個別性の高いスキーマをも併せて活性化されるという想定の下に作られた刺激であった。

このビデオクリップはスクリーンに映写して被験者に集団的に1回だけ提示された。

(2) 反応用紙

被験者の反応を記入するための反応用紙は3種類用意した。1つはビデオクリップの内容のよみとりを確認するための直後再生用であり、残り2つは1週間後の遅延再生用であった。

直後再生用は、ビデオを見た後すぐにストーリーを想像しながら記入する反応用紙で、2枚つづりであった。1枚目には実験者が読み上げるのと同じ内容の教示文と記入例が印刷された。2枚目は400字詰め原稿用紙であり、左端に箇条書きのための印が印刷された。

遅延再生用の反応用紙は自由再生条件とリアリティモニタリング条件に対応する2種類が用意された。自由再生条件は単に見たものを記述するよう教示された質問法であり、リアリティモニタリング条件は被験者それぞれがよみとったストーリー

一を記述した後、その記述の中からビデオで実際に見たものだけに下線を引くよう教示された質問法である。

自由再生条件の反応用紙は2枚つづりであった。教示文を除いて直後再生用と同じ形式であった。自由再生条件の教示文は「ビデオにはどんな映像がありましたか。あなたが見たことを出来るだけ詳しく、箇条書きで記入して下さい」というものであった。

リアリティモニタリング条件に対応する反応用紙は4枚つづりであり、最初の2枚は自由再生条件のものと教示文を除いて同じものであった。リアリティモニタリング法の教示文は「ビデオはどんなストーリーでしたか。あなたが思ったストーリーを出来るだけ詳しく、箇条書きで記入してください」というものであった。3枚目は「ストーリー記入が終わってからこのページをめくってください」という注意のみが書かれ、4枚目は「もう一度2枚目に戻り、今書き出したストーリーの中であなたがビデオの中で見たと思う部分にだけ下線を引いてください」という教示文が印刷されていた。それぞれの反応用紙は、左上端を綴じた状態で被験者に配布した。

手続き

(1) 刺激提示

本研究は、新入生がK女子大学に入学してから1ヶ月以内の期間に実施された。

被験者は大学の教室に集められ、実験者から説明を受けた。実験者は実験の目的について、ビデオクリップの内容のよみとりの調査であると説明し、ビデオクリップを見てそのストーリーをよみとるように教示した。したがって、被験者にとっては記憶を意図せずにビデオクリップを見る偶発学習事態となる。教示の後、ビデオクリップをスクリーンに映写して被験者集団に1回提示した。

ビデオクリップ終了後、内容のよみとりを調べ

るため、直後再生用の反応用紙を配布し、ビデオクリップのストーリーについて記述を求めた。記述は被験者のペースで行われ、時間は8分程度であった。

(2) 遅延再生

刺激提示日から1週間後に被験者は同じ教室に集められたが、後日再生を行うということは事前に被験者には知らされていなかった。

実験者は、まず被験者に1週間前の実験の続きであることを説明し、自由再生条件またはリアリティモニタリング条件の反応用紙を配り、用紙に印刷された教示に従って記入を求めた。記入は被験者のペースで行われ、時間は10分程度であった。

分析方法

自由再生条件においては、被験者の記述全体を再生とみなし、リアリティモニタリング条件では、下線部分を再生とみなし、以後の分析を試みた。

まず量的な分析として、ビデオクリップの内容から37の項目を抽出し、被験者群における再生数を検討した。ビデオクリップの内容から抽出された37の項目は、先行研究(田中ら, 2005)において再生された内容に基づき選定された。また、37項目のうち26項目は実際にビデオクリップの映像に含まれている事柄であり、11項目はビデオクリップの映像には含まれていない事柄であった。

次に、正再生におけるスキーマの個性性の影響について分析を試みた。刺激として用いられたビデオクリップの中から個性性の高いスキーマを利用しやすい状況として、エレベーターに関する状況と喫茶室に関する状況が設定された。本研究で設定されている個性性の高いスキーマは、K女子大学固有の特徴を持つ図書館に関わる知識である。K女子大学の図書館へ入館の際はまず5階まで上がらなければならない。また、喫茶室は同じ建物の地階に位置している。したがってエレベーターと喫茶室は個性性の高いスキーマと密接に関

わるため、個性性の高いスキーマが利用されやすい状況であると考えられる。また、個性性の高いスキーマを直接利用しない状況として鍵に関する状況と車に関する状況が設定された。これらはK女子大学図書館の特殊な建物構造と直接関係しない状況である。したがって、個性性の高いスキーマを直接利用しない状況であると考えられる。

個性性の高いスキーマを利用しやすい状況から、実際にビデオクリップの映像に含まれる場面として、エレベーターに関する状況から「エレベーターを待つ」、喫茶室に関する状況から「飲み物を飲む」が分析対象として選ばれた。したがって、被験者がこれらの場面を再生した場合、それらは個性性の高いスキーマに基づく正再生となる。

個性性の高いスキーマを直接利用しない状況からも同様に、実際にビデオクリップの映像に含まれる場面として、鍵に関する状況から「鍵を探す」、車に関する状況から「車に乗る」が分析対象として選ばれた。したがって、被験者がこれらの場面を再生した場合、それらは個性性の低いスキーマに基づく正再生となる。それぞれの場面について再生した被験者数をカウントし百分率を求め、これを正再生率として分析を試みた。

さらに、実際には見ていない事柄を「見た」と思い出す虚再生におけるスキーマの個性性の影響について分析を試みた。

正再生と同様に、個性性の高いスキーマを利用しやすい状況から、実際にビデオクリップの映像には含まれなかった場面として、エレベーターに関する状況から「エレベーターに乗る」、喫茶室に関する状況から「食事をする」が分析対象として選ばれた。これらの場面は実際にはビデオクリップの映像に含まれていないため、被験者がこれらの場面を再生した場合、それらは個性性の高い

スキーマに基づく虚再生となる。

個別性の高いスキーマを直接利用しない場面からも同様に、実際にはビデオクリップの映像に含まれない場面として、鍵に関する状況から「鍵を見つける」、車に関する状況から「車を発進させる」が分析対象として選ばれた。これらの場面も実際にはビデオクリップの映像には映し出されていないため、被験者がこれらの場面を再生した場合、それらは個別性の低いスキーマに基づく虚再生となる。

それぞれの場面について虚再生した被験者数をカウントし百分率を求め、これを虚再生率として分析を試みた。

結果

項目再生数

再生の量的な側面を検討するため、被験者群ごとに37項目のうち再生された項目数をカウントし、分析を試みた。平均再生数をTable1に示す。

2つのテスト条件ごとに被験者群における平均再生数についてt検定を行ったところ、両テスト条件ともに被験者群による平均再生数に差は認められなかった。リアリティモニタリング条件にお

いては、ストーリー一部分、下線部分ともに被験者群による平均再生数に差は認められなかった。

次に37項目のうちビデオクリップの映像に含まれない11項目について、虚再生された項目数をカウントし、分析を試みた。平均虚再生数をTable2に示す。

被験者群における平均虚再生数についてt検定を行ったところ、両テスト条件ともに被験者群による平均虚再生数に差は認められなかった。また、リアリティモニタリング条件においては、ストーリー一部分、下線部分ともに被験者群による平均虚再生数に差は認められなかった。

以上の結果から、スキーマの個別性の強度は再生の量的な側面において影響が示されないと考えられる。

正再生率

個別性の高いスキーマに基づく正再生率

まず、個別性の高いスキーマを利用しやすい状況における正再生率について分析を試みた。刺激となるビデオクリップには、エレベーターに関する状況と喫茶室に関する状況がある。これらの状況より実際にビデオクリップの映像に含まれてい

Table1 37項目に対する平均再生数(SD)

テスト条件	個別性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	10.78(3.03)	9.66(2.85)
リアリティモニタリング(ストーリー一部分)	11.77(3.88)	11.49(3.19)
リアリティモニタリング(下線部分)	8.67(4.05)	8.49(3.44)

Table2 11項目に対する平均虚再生数(SD)

テスト条件	個別性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	2.81(1.32)	2.29(1.52)
リアリティモニタリング(ストーリー一部分)	3.13(1.83)	3.03(1.38)
リアリティモニタリング(下線部分)	1.73(1.38)	1.77(1.22)

る「エレベーターを待つ」と「飲み物を飲む」を再生した被験者数をカウントし、正再生率を求めた。各場面の正再生率をTable3 とTable4 に示す。

被験者群とテスト条件の2 要因について、正再生率の逆正弦変換値を算出し、 χ^2 分布を使った分散分析を行ったところ、「飲み物を飲む」は、被験者群の主効果が有意であった ($\chi^2=6.41$, $df=1$, $p<.05$)。すなわち、スキーマ強群の方がスキーマ弱群よりも、正再生率が高いことが示された。一方、「エレベーターを待つ」については、有意な差は認められなかった。

個性性の低いスキーマに基づく 正再生率

次に、個性性の高いスキーマを直接利用しない状況における正再生率について分析を試みた。刺

激となるビデオクリップには、鍵に関する状況と車に関する状況がある。これらの状況から、実際にビデオクリップの映像に含まれる「鍵をさがす」と「車に乗る」を再生した被験者数をカウントし、正再生率を求めた。各項目の正再生率をTable5 とTable6 に示す。

被験者群とテスト条件の2 要因について、正再生率の逆正弦変換値を算出し、 χ^2 分布を使った分散分析を行ったところ、「鍵を探す」と「車に乗る」は、ともに有意な差は認められなかった。

虚再生率

個性性の高いスキーマに基づく 虚再生率

正再生率と同様、エレベーターに関する状況と喫茶室に関する状況という個性性の高いスキーマ

Table3 個性性の高いスキーマに基づく 正再生率(エレベーターを待つ)

テスト 条件	個性性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.167	.170
リアリティモニタリング	.167	.114

Table4 個性性の高いスキーマに基づく 正再生率(飲み物を飲む)

テスト 条件	個性性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.444	.341
リアリティモニタリング	.500	.200

Table5 個性性の低いスキーマに基づく 正再生率(鍵を探す)

テスト 条件	個性性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.500	.366
リアリティモニタリング	.400	.457

Table6 個性性の低いスキーマに基づく 正再生率(車に乗る)

テスト 条件	個性性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.611	.585
リアリティモニタリング	.333	.486

を利用しやすい状況から、実際にビデオクリップの映像には含まれてない「エレベーターに乗る」と「食事をする」を再生した被験者数をカウントし、虚再生率を求めた。各項目の虚再生率をTable7とTable8に示す。

被験者群とテスト条件の2要因について、虚再生率の逆正弦変換値を算出し、 χ^2 分布を使った分散分析を行ったところ、「食事をする」は被験者群とテスト条件の交互作用が有意であった($\chi^2=9.19$, $df=1$, $p<.05$)。単純効果の検定から、スキーマ弱群におけるテスト条件の単純主効果が有意であった。すなわち、スキーマ弱群において、自由再生条件はリアリティモニタリング条件よりも虚再生が多かった。一方、「エレベーターに乗る」については有意な差は認められなかった。

個別性の低いスキーマに基づく虚再生率

次に、鍵に関する状況と車に関する状況という個別性の高いスキーマを直接利用しない状況から、実際にビデオクリップの映像には含まれてない「鍵を見つける」と「車を発進させる」を再生した被験者数をカウントし、虚再生率を求めた。各項目の虚再生率をTable9とTable10に示す。

被験者群とテスト条件の2要因について、虚再生率の逆正弦変換値を算出し、 χ^2 分布を使った分散分析を行ったところ、「鍵を見つける」、「車を発進させる」はともに有意な差は認められなかった。

Table7 個別性の高いスキーマに基づく虚再生率(エレベーターに乗る)

テスト 条件	個別性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.444	.439
リアリティモニタリング	.266	.314

Table8 個別性の高いスキーマに基づく虚再生率(食事をする)

テスト 条件	個別性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.194	.171
リアリティモニタリング	.267	.000

Table9 個別性の低いスキーマに基づく虚再生率(鍵を見つける)

テスト 条件	個別性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.139	.171
リアリティモニタリング	.167	.143

Table10 個別性の低いスキーマに基づく虚再生率(車を発進させる)

テスト 条件	個別性の高いスキーマの強度	
	スキーマ強群	スキーマ弱群
自由再生	.389	.463
リアリティモニタリング	.300	.314

考察

本研究では、個別性の高いスキーマの強度が虚記憶生起へ及ぼす影響について2種類のテスト条件において検討を試みた。

再生の量的な側面の分析として、項目再生数を検討したところ、正再生数、虚再生数ともに被験者群における差は認められなかった。したがって両被験者群は再生の量的な側面において差がないと考えられる。すなわち、本研究の結果から個別性の高いスキーマの強度の違いによる再生の量的な側面への影響は認められないことが示されたと考えられる。

次に、正再生率について検討を試みた。ここでは、個別性の高いスキーマに基づく正再生率と個別性の低いスキーマに基づく正再生率について検討された。個別性の低いスキーマに基づく正再生率には、テスト条件と被験者群による有意な効果は示されなかった。したがって、個別性の高いスキーマの強度による影響は認められないと考えられる。また、テスト条件による違いもないと考えられる。

一方、個別性の高いスキーマに基づく正再生率は、被験者群による効果が示された。つまり、スキーマ強群の方がスキーマ弱群よりも正再生率が高いことが示されたのである。この結果は、強固な個別性の高いスキーマを持つ場合、実際に見た事柄の記憶が促進される可能性を示している。先行研究では、個別性の高いスキーマを利用しやすい状況の再生について、主に記憶のエラーである虚再生について検討がなされてきた。したがって、個別性の高いスキーマが虚再生を誘発するという記憶への妨害的な側面が強調されてきた。しかし、ここで示された記憶への促進的な効果についても虚再生の検討とあわせて今後検証していく必要があると思われる。

次に、虚再生率の検討を試みた。正再生率と同

様、個別性の高いスキーマに基づく虚再生率と個別性の低いスキーマに基づく虚再生率について分析を試みたところ、個別性の低いスキーマに基づく虚再生率は、被験者群による効果は示されなかった。したがって、個別性の高いスキーマの強度による影響は認められないと考えられる。また、テスト条件の効果も示されなかった。これまで個別性の低いスキーマに基づく虚再生については、リアリティモニタリングに注目する判断がなされることで抑制効果が示されてきた。しかし、本研究では、個別性の低いスキーマに基づく虚再生におけるリアリティモニタリングの効果が示されなかった。本研究はこれまでの検討の中でもっとも大規模な集団において実験が実施された。ここでの結果を解釈するためには、更なる検討が必要であり、実験を行う上での状況の設定について今後工夫が必要であると思われる。

一方、個別性の高いスキーマに基づく虚再生率は、被験者群とテスト条件の交互作用が示された。下位検定の結果、スキーマ弱群において、自由再生条件はリアリティモニタリング条件よりも虚再生が多いことが示された。つまり、比較的弱い個別性の高いスキーマを持つ者は、リアリティモニタリングを用いることにより、個別性の高いスキーマに基づく虚再生の生起が抑制されることが示唆された。これは、個別性の高いスキーマを全く持たない被験者と同様の結果である(田中ら, 2005)。一方、強固な個別性の高いスキーマを持つ者にはそのような抑制効果は示されなかった。この結果は、個別性の高いスキーマが日々の経験を通して強固なものとなることにより、虚再生を減少させるリアリティモニタリングの効果を抑制するようになることを示唆していると思われる。

しかし、本研究における個別性の高いスキーマを利用する状況の結果には矛盾が見られる。つまり、個別性の高いスキーマが利用されると想定さ

れた2つの状況(エレベーターに関する状況と喫茶室に関する状況)の結果が一致しなかったのである。すなわち、エレベーターに関する状況においては、正再生率と虚再生率ともに上述したような結果は示されなかった。このように結果の一致が見られなかった原因としていくつかの可能性が考えられる。

1つは、ストーリーの中での中心度の違いがあげられる。エレベーターに関する状況は、ビデオクリップのストーリーの中では周辺の場面である。一方、喫茶室に関する状況は、ストーリーの中での主要な場面の1つであると思われる。このように、個別性の高いスキーマを利用しやすい状況では、ストーリーにおける中心度がリアリティモニタリングの成否に影響を及ぼす可能性がある。

さらに、個別性の高いスキーマの強度の操作方法に関する問題があげられる。本研究では新入生の入学後1ヶ月以内に実験を実施した。これは、比較的弱いスキーマを持つ被験者として設定された新入生のスキーマが強固に形成されないようにするためであった。しかし新入生の中には、既に図書館を頻繁に利用している新入生が含まれていた可能性がある。そのような新入生は入学後間もなく強固なスキーマを持つようになったかもしれない。また、スキーマ強群として設定された2～4回生についても、2回生と4回生とでは、図書館の利用頻度などが異なる可能性がある。このように各被験者によって図書館の利用頻度が様々であり、本研究で用いた在学期間に基づく個別性の高いスキーマの操作では不十分であった可能性がある。今後は図書館の利用頻度、図書館への親近性を調査するなど、より的確なスキーマの強度の操作が必要であると思われる。

目撃証言の正確性を考える上で、個別性の高いスキーマの影響は無視できない点であると思われる。

る。なぜなら、事件や事故の目撃者はその場面や状況をよく知る人物であることも多いと予想される。そのような人物はその場面において個別性の高いスキーマを持つ可能性が十分あると思われるからである。本研究では、特に個別性の高いスキーマが獲得される過程に注目し、スキーマの強度の操作を試みた。今後は、目撃者が語る出来事についてどの程度個別的なスキーマを有するかという点に注目して証言の正確性を検証する必要があるだろう。また、どのようにすれば個別性の高いスキーマを持つ目撃者から正確な情報を得ることができるかという聴取方法の検討も必要であると思われる。

引用文献

- Barclay, C. R., & Wellman, H. M. 1986 Accuracies and inaccuracies in autobiographical memories. *Journal of Memory and Language*, 25, 93-103.
- Brewer, W. F., & Treyens, J. C. 1981 Role of schemata in memory for places. *Cognitive Psychology*, 13, 207-230.
- Eysenck, M. W. 1990 *The Blackwell dictionary of cognitive psychology*. Basic Blackwell. 野島久雄・重野純・半田智久(訳)1998 認知心理学事典 新曜社
- Intraub, H., & Richardson, M. 1989 Wide-angle memories of close-up scenes. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 15, 179-187.
- Johnson, M. L., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. 1993 Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.
- 金城光 2001 ソースモニタリング課題を中心としたソース・メモリ研究の動向と展望 心理学研究 72, 134-150.
- List, J. A. 1986 Age and schematic differences in the reliability of eyewitness testimony. *Developmental Psychology*, 22, 50-57.
- 仲真紀子 2001 日常記憶: 場所と時間の記憶 渡部保夫(監修) 目撃証言の研究 北大路書房 p166-184.
- Nakamura, G.V., Graesser, A. C., & Zimmerman, J.A., Riha, J. 1985 Script processing in a natural situation. *Memory & Cognition*, 13, 140-144.

Salmaso, P., Baroni, M. R., Job, R., & Peron, M. E. 1983
Schematic information, attention, and memory for
place. *Journal of Experimental Psychology: Learning,
Memory, and Cognition*, 9, 263-268.

田中晶子 2003 スキーマの個別性が虚再生に及ぼす影
響—個別の聞き取り 場面を用いた検討— 教育学・心
理学論叢 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要
3, 113-125.

田中晶子・広瀬雄彦・高岡昌子 2005 スキーマの個別性
が虚再生に及ぼす影響—目撃証言の観点から— 心理学
研究 75, 471-478.

Waddell, K. J., & Rogoff, B. 1987 Contextual organization and
intentionality in adults' spatial memory. *Developmental
Psychology*, 23, 514-520.

